

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2022年2月1日発行
 戦史館事務局〒029-4427
 岩手県奥州市衣川陣場下
 41番地 齧オフィス花岡
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩淵 宣輝 専務理事 小原 守夫 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

戦史館 活動のふりかえりとこれから

2022年は新型コロナウイルスの第6波で始まりましたが、丸2年のコロナ禍で 皆さん体調を整えて何とか無事にお過ごしでしょうか。一昨年は終戦75年の節目、昨年2021年は太平洋戦争開戦80年といういずれも節目の年だったので、戦争の総括をきちんとすべきだったのですが、身動きがとれませんでした。また太平洋戦史館がNPO法人になってから20周年という記念の年でもあったのですが、記念事業もできないまま、第20回通常総会の開催は、会員が顔をあわせることもなく、書面議決にならざるをえませんでした。

しかしこのような時代にもかかわらず、多数の会員の皆様に、会員継続手続きと寄付による継続ご支援をいただきました。ありがとうございます。正会員は年々減少し、去年は155名になりましたが、はがきによる返信が111通到着し、1号議案2号議案何れも承認されました。またお一人おひとりの近況を知り、ご意見や感想を拝見すると、次のようなことばに集約されそうです。☆コロナが収束すれば遺骨帰還できるのでしょうか？☆法人になって20年！長い年月よく継続できましたね。☆若い人が一番苦しい時代。次の世代に負の遺産を担わせたくない。何をどう伝えていくべきか？と。一緒に考えましょう。

コロナが収束すれば遺骨帰還は可能？

コロナ禍で身動きがとれないのは事実ですが遺骨帰還が進まないのはコロナ以前の問題です。2015年秋に遺骨帰還が叶わずアイブラボンディ島とムサキ島で収容されたまま帰還できない120柱が気になりますよね。写真は2015年3月6日アイブラボンディ島現地調査この日本兵の遺骸は島に仮安置されたままです。厚労省と日本大使館がパプア州へ「周知活動」として派遣されたものの、何の成果もないばかりか、むしろ活動を後退させて、渡航がその後ストップしてしまっただけのきっかけが、今から2年前の2020年1月28日のビアク市庁舎での説明会でした。戦史館は今、このときの厚労省と大使館に間違いを訂正させるべく動き始めました。



「周知派遣」というのは遺骨帰還に関する条約に基づいて、日本大使館と厚労省が、インドネシア教育文化省と協議したり、パプア州の関係自治体の理解と協力を得るための派遣です。ビアクでの住民説明会は、不穏な空気のまっただ中で行われました。2015年以来市長が不正問題で逮捕されて誰も統治できない…遺骨帰還事業が再開されるのは戦後賠償

次の頁へ

が無かったビアクにとって、日本の経済援助を期待して要求を出せるチャンスです。遂に「イワブチはウソツキ。車を贈ると約束したが守らない。車がほしい」という発言まで飛び出して収拾がつかないまま説明会が終了した…と厚労省の報告書にあります。

厚労省の担当者が日本を出発する前には、推進協会の山岸さん（長年厚労省の専門官として遺骨帰還に携わり現在は推進協会に勤務）が「相手国の意見は尊重しなければならないが、日本国政府が主体の事業であるから主張すべきことはきちんと主張するように」と念を押し、岩淵は訪問すべき人や場所、トラブル回避や現地交渉のノウハウを伝えたのですが、活用されることなくトラブルに吸い寄せられるようなビアク訪問でした。

「高齡者は来ないでほしい」 周知派遣の結果、教育文化省は日本側に「遺骨帰還に高齡者は派遣しないでほしい」と伝えてきました。厚労省の担当者に詳細を尋ねても「大使館の人の後ろについてあちこち行っただけ」というばかりです。

重要なミッションが再開できるかどうかという外交場面に、このレベルの担当者を日本政府の代表として送り込む厚労省にあきれますが、厚労省を通じて日本大使館に真相究明の照会をしても「外交のキビに触れる」のだから、回答が得られないまま…。

そこで2年前にさかのぼって間違いの訂正を求めることにしました。ビアク市の説明会で「イワブチはうそつき」と発言したのはユスフ・ルマロペンですが、事実は次の通り。2009年8月ユスフ氏は飲酒して整備不良車を運転し、助手席の友人を死亡させ、本人も大腿骨を折る大事故を起こしました。死亡した友人の家族への補償金や本人の治療費が足りず、戦史館に援助を求めてきました。ビアクは当時、戦史館会員による遺骸の搜索活動で新たな遺骸が次々発見され、1999年以降は遺骨帰還が継続して実施されていました。そのビアクで全面的に協力してくれるユスフさんの要望で「未帰還兵捜索用の車両を贈ろう」という募金活動が戦史館会員の中で進み、517,000円が寄せられていました。

事故の報を受けた戦史館では理事が緊急に話し合い、募金から35万円を送金。その後も残金で治療援助を行い、募金活動はお見舞い金に姿を変えて終了しました。彼はその時は戦史館会員に感謝し反省したのですが、その後もビアクへ派遣される厚労省職員に繰返し車を要求し、その都度厚労省から尋ねられるので、事故の真相を説明してきました。

今回、教育文化省と日本大使館が「高齡者は来ないで…」と伝えてきた高齡者とは名前を特定するとイワブチのことでしょう。教育文化省や大使館にとってパプアに精通しているイワブチが参加すると、ごまかしがきかないので参加させたくないのでしょう。一方、現地人は「日本は何もしてくれない」と口にします。その日本国の代わりにイワブチが濡れ衣を着せられるのはもう終わりにしたいし個人の名誉は挽回したい。遺骨帰還をからめて、イワブチを拒否する材料に利用されたくもありません。まずユスフ氏とその家族がビアク市と関係部署にあてて謝罪と訂正文を出すように求めています。

後期高齡者は間に合うのでしょうか？

岩淵だけでなく戦史館会員の多くが後期高齡者です。これから続く遺骨帰還までの長い道のり手順を考えると、遺骨帰還に参加するのは間に合わないかもしれませんね。コロナが収束して周知活動が仕切り直しされて、次に現地調査に戦史館が加わることができるのだろうと期待をこめて想定していますが、その次はインドネシアの考古学者による「事前

調査」を経て…これはもともと無人島だったムサキ島アイブラボンディ島でも調査するのだそうです。更に厚労省の都合で新たに遺骸のDNA鑑定が加わることになりました。

それはロシアからの遺骨帰還で厚労省が日本兵以外の遺骨を多数混入させていたというでたらめな仕事ぶりが報道され、慌てた厚労省が海外から帰還する全エリアでDNA鑑定をすることに變更したそうです。インドネシアも例外なく、現地で仮安置された遺骸をジャカルタで鑑定し、また現地へ戻すという過程が加えられました。ますます複雑で長くなる手順、私たちが生きていうちに遺骨は帰還できるのでしょうか？ 2019年に締結された日本兵遺骨帰還に関する国際約束は、日の目を見るのでしょうか？

遺骨帰還とか死者の人権とか戦後処理とか、誰も口にしなくなればこの国の役人はホッと安心して手を抜けるでしょうね。戦後処理にはお金も人の手間も年月も掛かります。そんなことにかかるお金で、新たな軍備を揃えるほうが“効率的だ”と考える指導者が現れるかもしれません。それで次の戦争の準備だってできるんですから。いや違う！そうさせてたまるか！不器用でも主張し続けようと、戦史館を始めた頃に思いを馳せました。

戦史館は終戦50年の夏にスタート

戦後50年経過した頃、世の中は「遺骨収集？いつまでそんなことしてるの？ヤスクニに祀られているんだからもういいじゃないか？」という声も聞こえてきました。西部ニューギニア方面へ慰霊巡拝に行く遺族に「家に墓があるのに何もそんな遠くへわざわざ」という声も。この方面の遺骨帰還は、終戦から30年経過した1975年に「遺骨帰還は諸事情により終了した」と概了宣言が出されてしまいました。はるか5千kmも南の地へ食料補給も無く兵士を送り出し、誰も迎えに行かず、戦後処理を投げ出してしまった日本。

肉親の戦没地へ慰霊巡拝したいと遺族が願っても、外務省はイリアンジャヤを危険地域に指定していました。何とか終焉の地を巡礼したいと願う遺族の希望を受けて、戦史館が現地を案内してきました。回を重ねるうちに、たおれたその場所でそのままの姿勢で白骨になった日本兵の遺骸とその傍らの遺留品に出会うようになりました。ときには土地を開墾している土中から…生活ゴミが堆積する下層から…洞窟の中からも新たな遺骸が発見されたという報告が届くようになりました。何とかしなければ…でも遺骨帰還は国家間の外交ルートで行われるので、勝手に遺骸を連れて帰ることはできません。厚労省へ毎回報告書を出して遺骨帰還を要請し続けました。1999年から24回行われた帰還事業で1568柱の遺骨が帰還できました。

2001年、戦史館がNPO法人の会員組織になったことで活動は大きく広がり2010年からは厚労省の未送還遺骨情報収集事業を引き受け、会員が現地で情報収集に参加しました。「戦史館の活動は帰り道。これからは、それいけどんどんというわけにはいきません。」と発言したのは法人となって10周年の節目2011年9月の総会でした。その後も、毎年しまい支度と言いつけているので“しまいじたく詐欺”とでも言われそうな気がします。

もはや次の戦争をくい止める方法があるのかどうか わかりませんが、少しでも次の戦争を先延ばしすることができるのは、私たち、戦史館会員にとって、あの戦争を忘れずに語り継ぐこと。若い世代にとっては事実を知ること、プラスの国際交流を続けること、これは誰にもストップさせられないはずです。